



第24回（2021 年度）大会プログラム・発表要旨集

日時：2021 年 12 月 18 日（土）／19 日（日）

会場：Zoom オンライン

★ 本プログラム目次 ★

	大会テーマ・スケジュール・大会参加登録	p. 2
	プログラム一覧表	p. 3
18 日	ワークショップ	p. 6
	語用論茶寮	p. 7
	□頭発表 room 1	p. 7
	□頭発表 room 2	p. 9
	□頭発表 room 3	p.11
	特別講演	p.14
	懇親会 1・2	p.14
19 日	□頭発表 room 1	p.15
	□頭発表 room 2	p.16
	□頭発表 room 3	p.17
	ポスター発表	p.18
	会員総会	p.19
	シンポジウム	p.19
	閉会式	p.20
	談話室・書籍展示	p.21

★大会テーマ★
語用論の地平を拓く：グライス哲学と方言学の最前線から

★ 大会スケジュール（概要） ★

12 月 18 日（土）～19 日（日）

大会へのログイン URL、および研究発表の発表資料、ポスター発表のポスターへのアクセスリンクは、参加費を支払い、参加登録をした方に 12 月 15 日（水）前後にお伝えする予定です。

12 月 18 日（土）

10:00～11:40：ワークショップ
10:00～11:55：口頭発表 1（Session 1）
12:10～12:55：語用論茶寮
13:00～14:15：口頭発表 2（Session 2）
14:20～15:35：口頭発表 3（Session 3）
15:40～16:40：特別講演 三木那由他先生
17:00～18:20：懇親会 1
18:30～20:00：懇親会 2

12 月 19 日（日）

10:00～11:55：口頭発表 4（Session 4）
12:00～13:00：ポスター発表
13:00～13:30：休憩 30 分
13:30～13:50：会員総会
13:50～16:30：シンポジウム
16:30～16:40：閉会式

★ 大会参加登録・参加費 ★

事前登録 一般会員 1,000 円、学生会員（院生・学部生）無料 非会員 1,000 円

※会員の方は日本語用論学会公式ホームページ⇒「会員専用ページ」⇒「大会参加」で登録。

※今年度会費が納入済みでないと、事前登録はできません。

※事前登録には 1,000 円の事前納入（クレジット決済・銀行振込）が必要です。

※事前登録の締切は **12 月 10 日(金)**です。

※非会員の方は日本語用論学会公式ホームページ⇒「参加申込フォーム」にて登録してください。

会費・大会参加費免除について：

日本語用論学会では、激甚災害およびこれに準ずる災害で被害に遭われた会員の皆様に対し、お申し出いただいたことにより、当該年度の「年会費」ならびに「年次大会参加費」を免除させていただきます。（すでに会費納入がお済みの場合、次年度の会費に充当することも可能です。）

また、「新型コロナウイルス感染症」の直接・間接的影響による著しい経済的な影響を被っている会員の皆様におかれましては、以下の連絡先にまずはご相談ください。

【日本語用論学会事務局】

〒448-8542 愛知県刈谷市井ヶ谷町広沢 1

愛知教育大学 人文社会科学系 日本語教育講座 北野浩章 研究室内

E-mail: secretary (at) pragmatics.gr.jp

日本語用論学会 第 24 回大会 プログラム(一覧表)

大会テーマ「語用論の地平を拓く:グライス哲学と方言学の最前線から」

開催日時： 2021 年 12 月 18 日(土)、19 日(日) 10:00 開始

開催方法： Zoom オンライン（リアルタイム方式）

大会へのログイン URL、および研究発表の発表資料、ポスター発表のポスターへのアクセスリンクは、参加費を支払い、参加登録をした方に 12 月 15 日（水）前後にお伝えする予定です。

大会のコンテンツは以下の通りです。

【ワークショップ】(1 件)

- ◆ **リアルタイム方式**（発表・質疑ともライブ）で行います。
- ◆ 発表者は口頭発表と質疑応答（合計 1 時間 40 分）を、大会当日に Zoom にて行います。
- ◆ 画面共有で 資料が提示されます。

【口頭発表】(26 件)

- ◆ **リアルタイム方式**（発表・質疑ともライブ）で行います。
- ◆ ZOOM 上で実施すること以外は、対面による通常の学会発表と同じです。
- ◆ 【口頭発表 25 分+質疑応答 10 分】
- ◆ 画面共有で資料が提示されます。

【ポスター発表】(3 件)

- ◆ **リアルタイム方式**（発表・質疑ともライブ）で行います。
- ◆ 発表者は画面共有をしながら「説明」と「質疑応答」を行います。
- ◆ 【説明 15 分+質疑応答 15 分】×2 回

【特別講演】【会員総会】【シンポジウム】

- ◆ **リアルタイム方式**で行います。
- ◆ 18 日(土)は【特別講演】を行います。
- ◆ 19 日(日)は【会員総会】【シンポジウム】を行います。

【12月18日(土)】 ZOOM オンライン (リアルタイム方式)

ROOM1		ROOM2		ROOM3		
10:00 11:40	[Workshop] 配慮表現の普遍性と個別性をめぐって 代表：山岡政紀（創価大学） p.6	司会：堀江薫（名古屋大学）		司会：鈴木亮子（慶應義塾大学）		
		否定のスコープの中に現れる自由選択について 徐子程（神戸大学大学院） p.9		談話標識としての「なんなら」：多様な意味用法への文法化現象 水田洋子（国際基督教大学） p.11		
		Break（5minutes）				
		ミャンマー語の指示詞の特徴 - ho と hò ka を中心に - イン・モウテッ（岡山大学大学院） p.9		スルトイイ文のもつモダリティ - 希求文の包括的記述を目指して - 宮城星留（岡山大学大学院） p.11		
		Break（5minutes）				
		コト情報の言語化と定形性について 尹盛熙（関西学院大学） p.9		語順の意味分析：かき混ぜ文を例にして 高橋武志（京都外国語大学大学院） p.12		
12:10 12:55	【メインルーム】 語用論茶寮 Salon 「若手向け 国際学会・国際ジャーナルの経験談」 ゲスト：柴崎礼士郎先生（明治大学） MC：小松原哲太・堀内ふみ野 p.7					
	Break（5minutes）					
	司会：山口征孝（神戸外国語大学）		司会：中島浩貴（島根大学）		司会：秦かおり（大阪大学）	
	Responding to self-praise in Japanese Hiroko Itakura（Shinshu University） p.7		英語の動詞由来-er 名詞の多義的解釈について 砂谷恒夫（フリー） p.10		Investigating the online processing of pragmatic elements for adjective sentences in Japanese and Chinese Yusuke Sugaya（Osaka University） p.12	
	Break（5minutes）					
13:40 14:15	COVID-19 discourse in Linguistic Landscape: Dynamic positioning through pragmatic usage Saya IKE (Mejiro University)& Yaeko HORI p.8		副詞 ever が疑問文に与えるスキーマ的な意味の考察 山田美紀（金沢大学大学院） p.10		The speech act of comforting during COVID-19: A case study of Spanish, English and Japanese speakers CLOS, Ruben (University of the Ryukyus) p.12	
	Break（5minutes）					
14:20 14:55	司会：山口征孝（神戸外国語大学）		司会：有光奈美（東洋大学）		司会：大久保朝憲（関西大学）	
	Allocutivity as positive politeness: speaker/addressee-indexing functions of -gai[wai/zoi]-ya and -gai[wai/zoi]-ne in the Kanazawa dialect of Japanese Katsunobu Izutsu and Takeshi Koguma p.8		情報の有益性が低い広告表現における視座の「ズーム・アウト」 加藤久俊（フリー） p.10		従属節発話における文脈と慣習性 —「単純な」／「慣習化された」主節省略の分析から— 平尾恵美（舞鶴工業高等専門学校） p.13	
	Break（5minutes）					
15:40 16:40			和菓子の命名における認知的基盤 —百科事典的知識を通じた文化理解に向けて— 福留奈美（東京聖栄大学）・松浦光（横浜国立大学非常勤） p.11		LINEに見られる「笑」の語用論的機能 高村遼（立正大学） p.13	
	Break（5minutes）					
	【メインルーム】特別講演（60分） 司会：岡本雅史（立命館大学） 「推意・意味・意図：グライス哲学における推意」 三木 那由他 先生（大阪大学） p.14					
17:00	懇親会 1（Reception 1：～18:20）		【Zoom メインルーム】 p.14			
	Break（10minutes）					
18:30	懇親会 2（Reception 2：～20:00）		【Wonder.me】 p.14			

【12月19日(日)】 ZOOM オンライン (リアルタイム方式)

	ROOM1	ROOM2	ROOM3	
	司会：ツォイ・エカテリーナ（一橋大学）	司会：中村香苗（淡江大学）	司会：遠藤智子（東京大学）	
⑧ 10:00 10:35	補足の接続詞における配慮の考察 ー「ただ」を中心にー 中後幸恵（創価大学大学院）p.15	縦断的データにみる中級日本語学習者の語用論的理解能力ー習得過程と言語環境の変化との関連性をめぐってー 堀田智子（東北大学） p.16	「ほめに対する応答」に影響する要因の分析ーほめられる側の立場からー 昂 燕妮（名古屋大学大学院）p.17	⑧ 10:00 10:35
	Break (5minutes)			
⑨ 10:40 11:15	「マウンティング」をイン／ボライトネスから考える：「自分ほめ／自慢 (self-praise, bragging)」との比較を通して 大塚生子（大阪工業大学） p.15	DLA（対話型アセスメント）における質問応答連鎖の会話分析ー第三の位置での指導者の反応に注目してー 嶋原耕一（東京外国語大学） p.16	日本語の慰め行動における性差ー同性友人間の比較からー 張 楽（金沢大学大学院） p.17	⑨ 10:40 11:15
	Break (5minutes)			
⑩ 11:20 11:55	打ち言葉の感情表現：Twitter 上の「怒り」表現に着目して 西村綾夏（フリー） p.15	中国語の例示を表す形式の意味拡張：母語話者の会話データに基づいて 黄 琬婷（上智大学） p.16	会話文での AND X 形式の表現と話し手 野島啓一（北九州市立大学（非常勤）） p.17	⑩ 11:20 11:55
	Break (5minutes)			
12:00 13:00	【ポスター発表】 Poster Session 会場係：井出里咲子（筑波大学） 【Room1】 知人関係における日本語の交感発話の特徴ー会話開始部を中心にー 肖 潔（北海道大学大学院） p.18 【Room2】 金沢市の商業地に見られる禁止表現ーターゲットによる違いの分析ー 賈 羽飛（金沢大学大学院） p.18 【Room3】 The Sequential Environments of the Appendor Question Sally Jones (Nagoya University) p.18			12:00 13:00
13:30 13:50	【メインルーム】 会員総会 General Meeting of Members （20 分）			13:30 13:50
13:50 16:30	【メインルーム】 シンポジウム Symposium 「語用論的方言学への招待」 司会：小林隆先生（東北大学） 発表 1 語用論的方言学の構想 小林隆先生（東北大学） 発表 2 言語行動の方言学 中西太郎先生（跡見学園女子大学） 発表 3 ボライトネスの方言学 津田智史先生（宮城教育大学） 発表 4 語用論的方言学の資料 椎名渉子先生（名古屋市立大学） コメンテーター 滝浦真人（放送大学） p.19			13:50 16:30
16:30 16:40	【メインルーム】 【閉会式】 Closing Ceremony p.20			16:30 16:40

12月18日(土)

ワークショップ(10:00~11:40)

会場: Room 1

●配慮表現の普遍性と個別性をめぐって

オーガナイザー: 山岡政紀(創価大学)

山岡政紀(創価大学) 牧原功(群馬大学) 小野正樹(筑波大学) 甲田直美(東北大学)
西田光一(山口県立大学) 李奇楠(北京大学) リナ・アリ(カイロ大学)

ポライトネス機能が慣習化することで成立する配慮表現は、どの言語にも見られる普遍的現象であるが、個々の具体的な配慮表現については個別言語を超えて普遍的に見られるものと、ある個別言語において特有のものがある。本ワークショップでは4種の配慮表現について取り上げ、複数言語に見られる各表現の用法を対照させながら配慮表現の普遍性と個別性について考察する。

①配慮表現に関わるテンスの日英対照

牧原功(群馬大学) 西田光一(山口県立大学)

英語では、一般に法助動詞の *can* や *may* など、時制に直接関与しない要素を形式的に過去形にし、対人配慮の効果を付与することが知られる。一方、日本語には英語の法助動詞に相当する語群がなく、聴者の情報処理を軽減する「ご一泊でよろしかったでしょうか」や、現在の判断ではない形を採ることで FTA を弱める「ここに少し問題があると感じました」のように、時制形式を直接的に操作している。ただし、英語でも助言を求める際に現在形の “I hope you'll give us some advice.” より過去形の “I wondered you'd give us some advice.” の方がネガティブ・ポライトネスを伝えることもあり、日本語でも「早く行ったほうがいいよ」のように形式化が進んだ時制形式の使用も見られる。これらの点から、それぞれの言語でポライトネスに関わるテンス・アスペクト形式の慣習化の度合いが異なることを示し、日本語では単語や形態素の時間に関わる意味から派生した機能によってポライトネスがコントロールされていることを示す。

②禁止表現における背景化の多言語対照

小野正樹(筑波大学) 西田光一(山口県立大学) リナ・アリ(カイロ大学)

禁止表現でも「相手との対人関係をなるべく良好に保つ」必要はあるが、主体の明示化は配慮につながらず、主体の背景化が見られる。“Thank you for not smoking.” は聴者 “You” を明示化しているが、禁煙の標語では “Smoking kills you.” より、主体に言及しない “Smoking kills.” の方が、頻度が高い。アラビア語でも “mamnu3 tedakhan hena”(あなたはここでタバコを吸ってははいけません) より、主体を表さない “altadkhen mamnu hena”(ここは禁煙です) の方がポライトであり、これは話し手が怒っているときの主体を背景化する表現方法と共通している。禁煙キャッチフレーズを見ると “How Tobacco and Smoking Affects Your Health” (American Cancer Society), 「吸った分だけ明日が減る」(禁煙推進学術ネットワーク) は喫煙主体の視点表現、「たばこは周りの人の健康にも影響を及ぼします」(全国健康保険協会)、“Is any type of tobacco product safe?” (ACS) では、煙草自体を前景化した表現も見られ、禁煙のキャッチフレーズを対象として、アラビア語など多言語を観察する。

③マイナス評価の配慮表現に関する日中対照

李奇楠(北京大学) 山岡政紀(創価大学)

本発表は日本語の談話におけるマイナス評価を中心に、その中で使われている配慮表現を、中国語と対照しながら分析する。

- (1) 「まだちょっと久しぶりだから慣れてないよね？」
- (2) 「ちょっと難しいかな？もっと小室君っぽくていいけどなあ」
- (3) 「なかなか良くなってきたんじゃない？」

上記の三例は元の談話文脈においては、どれもいわゆるマイナス評価の発話となっているが、そ

のなかには、副詞（まだ、ちょっと、もっと、なかなか）、原因構文（だから）、疑問文（～よね？、～んじゃない？）、言いさし文（～けど）、終助詞（よね、なあ）などが使われ、評価者の配慮の気持ちを表わしている。そのような配慮表現は、中国語ではどうなっているのか、同じく副詞の“还、有点儿、更、非常”、原因構文“因为～”、疑問文“～吧？不是～吗？”などのような言い方でマイナス評価の配慮表現となるのか、日中両言語の配慮に関する表現の共通点と相違点を探る。

④副詞による賛同表現の日英対照

山岡政紀（創価大学） 甲田直美（東北大学） 西田光一（山口県立大学）

日本語において、確実性を表すナ形容詞「確かだ」の連用形から派生した副詞「たしかに」が、会話において賛同表現として用いられることがある。

(1)「ひょっとしたらあの男が犯人かもしれない」「たしかに」

この場合の「たしかに」は独立語文的に先行発話への賛同を表す。この例の「たしかに」は不確実な推測への賛同を述べるのみで、確実性の原義は捨象されている。

英語でも同様に確実性の副詞が独立語文的に賛同を表すことがある。

(2)“I think he is a top artist in USA”, “Exactly!”

しかし、(3)のような不確実な推測への賛同には使いにくいことから、日本語の「たしかに」と違って完全に確実性の原義が捨象されてはいないと考えられる。

(3)“I guess that guy may be a culprit”, “? Exactly!”

他にも、日本語の「本当に」、「まったく」や英語の“absolutely, certainly, definitely, right”など、日英両言語に共通して見られる確実性の副詞による賛同表現は多くあり、これらの慣習化現象と、両言語における用法の異なりについて考察する。

^{サロン} 語用論茶寮（12:10～12:55）

会場：メインルーム

●国際学会・国際ジャーナルの経験談

ゲスト：柴崎礼士郎（明治大学）

MC:小松原哲太（神戸大学）・堀内ふみ野（大東文化大学）

カリフォルニア大学サンタ・バーバラ校で学位を取得され、Journal of Japanese Linguistics (De Gruyter Mouton)、East Asian Pragmatics (Equinox) などの国際ジャーナルに論文を掲載、International Pragmatics Association (IPrA) Pragmatics 査読員、SAGE Publications Article Editor を歴任されるなど、国際的な研究者として活躍される柴崎礼士郎先生をゲストとしてお迎えし、体験談をお話いただきます。国際学会や国際ジャーナルを舞台にした研究者を目指す若手研究者、大学院生の参加者からの質問も受け付けます。

口頭発表（13:00～14:55）

会場：Room1

1—④～⑥司会：山口征孝（神戸外国語大学）

1—④13:00～13:35

Responding to self-praise in Japanese

ITAKURA, Hiroko (Shinshu University)

Self-praise broadly refers to a positive evaluative statement about self and includes different types (e.g., ‘I am a genius.’; ‘My son studies too much.’). The present study examines how Japanese speakers respond to the risky speech act in conversation. The focus is on what

different response types are observed and if the level of directness of self-praise is related to a response type. To this end, 25 men's conversation and women's conversations were selected from the conversational corpus (BTSJ; Usami, 2018).

Findings include that there are four major response types: acknowledgement, agreement, challenge, and backchannel, and the level of directness of self-praise and a response type are related. In addition, different response types construct different interpersonal relationships. For example, a weak agreement triggers retraction of self-praise upholding modesty, while backchannel expressions consolidate solidarity. This suggests that depending on the type of self-praise and response, the participants manage rapport differently.

Reference:

Usami, Mayumi (ed.), 2018. *BTSJ Natural Conversation Corpus with Transcripts and Recordings*, NINJAL Institute-based projects: Multiple Approaches to Analyzing the Communication of Japanese Language Learners, Sub-project: Studies of the Language Use of Japanese Language Learners.

1—⑤13:40~14:15

COVID-19 discourse in Linguistic Landscape: Dynamic positioning through pragmatic usage

Saya IKE & Yaeko HORI

This study employs ethnographic linguistic landscape (LL) approaches (Blommaert and Maly, 2014) to investigate pragmatic aspects of COVID-19 related signage. Approximately 750 signs related to COVID-19 were collected in Kyoto last summer, and coded according to addresser(s)/addressee(s), function(s), permanency, and modality. There is a clear difference in use of politeness strategies (Brown and Levinson, 1987) between top-down (issued by local and national governments) and bottom-up signs (produced by individual shops), specifically in directive speech acts. Furthermore, shops and restaurants are one of the addressees of the top-down signs but also the addressers of the bottom-up signs. These addressees/ers attempt to negotiate their unstable "in-between" positions by delicately designing the layout of multiple signs to maximise their power in controlling/eliciting their customers' behaviours. This paper sheds light on the aspects of complex and fluid stance taking and positioning processes within LL through pragmatic analysis, suggesting new directions of LL research.

References

Blommaert, J., & Maly, I. (2014). Ethnographic Linguistic Landscape Analysis and social change: A case study. *Tilburg Papers in Culture Studies*, paper 100.

Brown, P., & Levinson, S. C. (1987). *Politeness: Some Universals in Language Usage*. Cambridge University Press.

1—⑥14:20~14:55

Allocutivity as positive politeness: speaker/addressee-indexing functions of -gai[wai/zoi]-ya and -gai[wai/zoi]-ne in the Kanazawa dialect of Japanese

Katsunobu Izutsu and Takeshi Koguma

Allocutivity originally refers to a Basque phenomenon where the addressee's gender is marked on the tensed matrix verb if the addressee is given familiar treatment (Bonaparte 1862; Antonov 2015). In utterances to an addressee treated as familiar, the verb takes an allocutive marker (male -k; female -n), as in n-oa-k and n-oa-n, while it takes neither in utterances to an addressee not treated as such, as in n-oa. Kanazawa Japanese finds similar allocutivity marking in -ya and -ne. Male speakers can adopt -gaiya, -waiya, and -zoiya to familiar MALE addressees and -gaine, -waine, and -zoine to familiar FEMALE addressees, and find it somewhat hard to employ -gaiya, -waiya, and -zoiya to FEMALE addressees. This male use of the endings can be viewed as the indexing of addressee's gender, allocutivity à la Basque. We also argue that the relevant allocutivity is a manifestation of "positive politeness" (Brown and Levinson 1987).

References: (1) Antonov, Anton. 2015. Verbal allocutivity in a crosslinguistic perspective. *Linguistic Typology* 19. (2) Bonaparte, Louis-Lucien. 1862. *Langue basque et langue finnoises*. Strangeways and Walden. (3) Brown, Penelope and Stephen C. Levinson. 1987. *Politeness: Some universals in language usage*. Cambridge University Press.

会場：Room 2

2—①～③司会：堀江薫（名古屋大学）

2-①10:00~10:35

否定のスコープの中に現れる自由選択について

徐子程 (神戸大学大学院)

可能性演算子のスコープに現れる選言は自由選択推論 (Free Choice Inference (FCI)) を引き起こす。FCI に対処できるアプローチの一つは、Exh 演算子を用いることで、FCI を尺度推意として分析することである。しかし、Exh 演算子は文の任意位置に適用可能なため、過剰生成の問題が生じる。この問題を解決するため、先行研究では、Exh 演算子の分布に関する制限の原則が提案された。しかし、その結果、否定などの下方含意の環境の尺度推意・FCI は容認不可となるという新たな問題が生じる。本発表は Exh 演算子の適用原則に焦点を当て、それをより語用論の方向に調整する。とりわけ、演算子の適用結果とコンテキストとの整合性に着目することで、否定のスコープの中に現れる尺度推意・FCI に一貫して対処する分析を提案する。そして、提案は全称量化や条件法の前件などの他の下方含意の環境に一般化できると示す。

参考文献：(1) Enguehard, Émile and Emmanuel Chemla. 2021. “Connectedness as a Constraint on Exhaustification.” *Linguistics and Philosophy* 44(1), 79-112. (2) Fox, Danny and Benjamin Spector. 2018. “Economy and Embedded Exhaustification.” *Natural Language Semantics* 26(1), 1-50.

2-②10:40~11:15

ミャンマー語の指示詞の特徴—hōとhòk áを中心に—

イン・モウテツ（岡山大学大学院）

本発表は、ミャンマー語の指示詞の *ho*⁻ と *hóká* の特徴について分析した結果を報告する。先行研究において *hóká* は *ho*⁻ より遠いところを指し示す、或いは「かなり離れた」という意味で使用されると考えられてきた。しかし、実際には *ho*⁻ より近いところを指す場合もある。そこで本発表では *ho*⁻ と *hóká* の相違点は、指示対象が明瞭に見えるか否かによるということを主張する。発話時に話し手が意図する指示対象が明瞭に見えるると *ho*⁻ が使用されやすいのに対し、発話時に話し手が意図する対象が明瞭に見えておらず、容易には認定されない場合は *hóká* が使用されるという点で異なっている。また、同じ空間内に存在し、明瞭に見える対象においても、上に視線を向けて指し示す場合は *hóká* が使用されやすくなる。結論として、*ho*⁻ と *hóká* とともに直示用法において、遠距離を指示しうるが、指示対象の明瞭度や位置によって使い分けられることを明らかにした。

参考文献：(1)岡野 賢二．2011．「現代ビルマ語の「指示語」」、『東京外大東南アジア学』16、75-86。(2)岡野 賢二．2020．「現代口語ビルマ語の ၵႤး hò は指示詞か?」『東京外国語大学論集』100、163-184.

2-③1 1:20~1 1:55

コト情報の言語化と定形性について

尹盛熙（関西学院大学）

本発表の目的は、日本語に見られる新しい用法をいわゆる「定形性 (finiteness)」の観点から分析し、動作や行為、状態などの出来事及びそれに関連する情報がどの程度言語化されるかという、情報伝達の立場から考察することである。定形性に関する議論では、コト情報の典型的な言語化形式とされる動詞述語文に形態的な名詞要素を加えて形式全体の統語的資質を変えるという「名詞化」が広く知られている。一方で日本語では、名詞化に加えて、述語の一部または全部を省略することが文における定形性を調整する手段として用いられていると考えられる。そのような省略表現と関連して近年見られるのは、「～かも (しれない) です」「～しないと (いけない) だけど」などのように、いわゆるコンピュータの「だ」を用いて定形性の度合を高めるという現象である。

参考文献：(1) Givón, T. 2016. “Nominalization and Re-finitization.” In *Finiteness and Nominalization*, 272–296. Amsterdam. (2) 尹盛熙, 2021. 『ことばの「省略」とは何か』東京.

2—④13:00～13:35

英語の動詞由来-er 名詞の多義的解釈について

砂谷恒夫（フリー）

英語の動詞由来-er 名詞(以下「-er 名詞」)には2つのタイプがある(Taylor 2012)。1つは murderer のように基体動詞 murder と接尾辞-er の意味を合わせた文字通りの意味を持ち、その行為をした人が全員該当する語である。もう1つは基体動詞と接尾辞の合計だけでない新たな意味範囲を持つ語で、singer のように特に優れた人や職業とする人だけが該当する。本発表では前者を「合成的意味」、後者を「構文的意味」と呼ぶ。多くの研究者は-er 名詞を二者のいずれかに分類するが、Cohen (2016) は murderer には「殺人をした人」と「殺人の習性のある人」、singer には「その時歌っていた人」と「歌手」の2種類の意味があると主張する。それぞれ、前者が合成的意味、後者が構文的意味である。本発表では Cohen を支持し、基本的にすべての-er 名詞が両方の解釈をベースとして持ち、どちらの解釈がプロファイルされるかは文脈によって決まると主張する。

参考文献：(1) Cohen, Ariel. 2016. “A semantic explanation for the external argument generalization.” *Morphology*, 26: 91–103. (2) Taylor, John R. 2012. *The mental corpus - how language is represented in the mind*, Oxford University Press. (3) 三好郁夫. 1999. 「英語動詞から派生した -ER 名詞形の研究」『大東文化大学紀要』〈人文科学〉 37: 359-369.

2—⑤13:40～14:15

副詞 ever が疑問文に与えるスキーマ的な意味の考察

山田美紀（金沢大学大学院）

本発表では副詞 ever を伴う疑問文をとりあげる。

(1) a. Have you ever beaten him? (e.g. in your life)

b. Did you ever beat him? (e.g. when both of you were still professional players)

(Declerck 2006: 622)

(2) Do you ever wish you were back in Japan? –Sometimes. Not very often. (LDOCE)

(3) Do you ever listen to yourself? (Before Midnight [映画])

(1)は過去の経験の有無、(2)は出来事の頻度を問うとされるが、なかには(3)のように反語的用例もみられる。このように、関係する時間や文脈によって、意味に違いがみられるようだが、本発表では、認知言語学の道具立てによる説明を試みる。具体的には、ever since や wh-ever など多様な言語表現にも現れる ever にスキーマ的な意味を仮定することで、疑問文においては、「ある時間の領域のなかで、出来事を1つでも挙げられるか探すよう促す」という相手への要請が焦点化されるとし、これによって上記のような用例を統一的に説明できることを示す。

参考文献：(1) Declerck, R. 2006. *The Grammar of the English Tense System: A Comprehensive Analysis*. Berlin, New York: Mouton de Gruyter. (2) Huddleston, R. and G.K. Pullum. 2002. *The Cambridge Grammar of the English Language*. Cambridge: Cambridge University Press. (3) 今井隆夫. 2019. 『実例とイメージで学ぶ 感覚英文法・語法講義』東京：開拓社.

2—⑥14:20～14:55

情報の有益性が低い広告表現における視座の移動— アイロニーの意味構築過程を足がかりにした分析

加藤久俊（フリー）

広告表現の中でも、消費者の注意を引き寄せることを目的としたキャッチフレーズでは、消費者にとって有益な情報を端的に示すことが求められる。しかし実際には、新聞広告やポスター広告など、投資対効果が強く求められる広告表現の中であって、情報の有益性(informativeness)が低い印象を受けるキャッチフレーズが存在する。本発表では、Fauconnier (1979, 1985)で提案されたメンタル・スペース理論の立場から、アイロニーの意味構築過程に見られる間主観的な「視座の移動」に注目し、同様のプロセスが上述した種の広告表現に情報の有益性をもたらすことを明らかにする。

参考文献：(1) Tobin, V. and Israel, M. 2012. “Irony as a viewpoint phenomenon.” In Dancygier,

B., and Sweetser, E. (eds.) *Viewpoint in language: A multimodal perspective*, 25-46. (2) Verhagen, A. 2005. *Constructions of Intersubjectivity: Discourse, Syntax, and Cognition*.

2—⑦15:00~15:35

和菓子の命名における認知的基盤 ー百科事典的知識を通した文化理解に向けてー

福留奈美（東京聖栄大学）・松浦光（横浜国立大学非常勤）

本研究の目的は、和菓子の命名を認知的基盤により分類して、菓子分類名と結びつく語彙のリストを作成し、その意味を理解する上で百科事典的知識が必要なものとそうでないものを段階別に区別することにある。そこで、技術指導書にある代表的な和菓子名 114 点を語基に分け、広辞苑 (2018) の収録状況と永澤 (2019) を援用した語形成分類を行い、認知ドメイン・3つの比喻（メタファーの類似性、メトニミーの隣接性、シネクドキーの類種関係）を用いて、分析を行った。結果、辞書に定義がある菓子名とないものがあり、命名に含まれる各語基は、メトニミーの風味、味付け、中身、外装、人名・故事由来等、メタファーの形状、色、模様・文様、質感、イメージ、描写等、和菓子の類種のカテゴリーの伸縮に基づくシネクドキー等に分類された。特に、人名・故事由来等の語基の理解には、百科事典的知識が必要であることを指摘した。

参考文献：永澤 済. 2019. 「生物の和名・俗名における意味拡張」、森雄一・西村義樹・長谷川明香（編）. 『認知言語学を紡ぐ』、東京：くろしお出版、93-114.

新村出（編）. 2018. 『広辞苑第七版』東京：岩波書店

□頭発表（10:00~15:35）

会場：Room3

3—①~③司会：鈴木亮子（慶應義塾大学）

3—①10:00~10:35

談話標識としての「なんなら」ー多様な意味用法への文法化現象

水田洋子（国際基督教大学）

日本語の「なんなら」は、従来の代表的な用法（申し出や提案に控え目なニュアンスを与える）のみならず、近年の新用法（島田 2018）も含めて多様な意味用法を持つ。英語の談話標識の文法化（Ajmer 2002, Kim and Jahnke 2010）を参考にし、コーパス（BCCWJ）データの分析をふまえて、「なんなら」の多様な意味用法を副詞から談話標識への文法化の観点から分析する。「なんなら」の基本構造として、①「X なら～」の条件部分の非明示化、および②「X なら～、Y なら～、Z なら～、…」（場合分け）のうちの 1 つ、を想定し、そこからさまざまな意味用法に展開する文法化モデルを提案し、代表的な用法や新用法を含めて体系的にとらえる。

参考文献：(1) Ajmer, K. 2002. *English Discourse Particles: Evidence from a Corpus*. John Benjamins Publishing Company. (2) Kim, M-J and Jahnke, N. 2010. The Meaning of Utterance-Final Even. *Journal of English Linguistics*. (3) 島田 泰子. 2018. 「副詞『なんなら』の新用法：なんなら論文一本書けるくらい違う」、『二松学舎大学論集』61、1-23.

3—②10:40~11:15

スルトイイ文のもつモダリティー希求文の包括的記述を目指してー

宮城星留（岡山大学大学院）

本発表では「～といい」という形式を述語にする文（以下「スルトイイ文」と呼称）の表すモダリティーについて調査した結果、明らかになったことを提示する。従来、「といい」の表す〈願望〉は当該事態の制御可能性がない場合に基本的意味から分化するものとして扱われてきた（高梨 2010）。しかし、（「私は人間になりたいのです」という発話に対する）「なれるといいねえ」のような一部のスルトイイ文では、〈願望〉の表出に加え、終助辞ネの付与を通して〈励まし〉という発話行為が遂行される。本発表は〈励まし〉を〈聞き手が心理的好影響を受けることに対する話し手の望みに動機づけられた働きかけ〉と規定し、スルトイイ文が表す〈願望〉の下位タイプとして位置づけるものである。さらに、スルトイイ文に表される〈望み〉のあり方に注目することで〈勧め〉〈励まし〉〈願望〉が連続的に捉えられることを主張する。

参考文献：(1) 高梨 信乃 (2010) 『評価のモダリティー—現代日本語における記述的研究—』くろしお出版、(2) Searle, J.R. 1979. *Expression and Meaning: Studies in the Theory of Speech Acts*.

Cambridge : Cambridge University Press.(山田友幸監訳.2006.『表現と意味——言語行為論研究』
東京：誠信書房)

3-③11:20~11:55

語順の意味分析：かき混ぜ文を例にして

高橋武志（京都外国語大学大学院）

本研究はコーパスの定量的分析に基づき、日本語のかき混ぜ文の語順の意味を記述することを目的とする。近年、かき混ぜ文の語順には、統語的な特徴づけに限らず、意味的な特徴づけも与えられている（中本他 2006, Tanaka 2020）。だが、コーパスのような実際の言語使用におけるかき混ぜ文の語順に対しても、そのような意味的な特徴づけが可能であるか否かは十分に議論がなされていない。そこで、本研究では、コーパス（Maekawa et al. 2014）から「NがNをNにV」と「NがNにNをV」の2つのかき混ぜ文を抽出し、各語順における文意の実現傾向を分析した。本研究では、分析結果に基づき、(i) かき混ぜ文の各語順における文意の実現傾向の偏りは、語順と意味が対応関係を持つことの現れである；(ii) 語順と意味の対応関係は構文（Fillmore 1988）として特徴づけられる、という2点を主張する。

参考文献：中本敬子・李在鎬・黒田航. 2006. 「日本語の語順選好は動詞に還元できない文レベルの意味と相関する：心理実験に基づく日本語の構文研究への提案」『認知科学』13(3): 334-352.

3-④⑤司会：秦かおり（大阪大学）

3-④13:00~13:35

Investigating the online processing of pragmatic elements for adjective sentences in Japanese and Chinese

Yusuke Sugaya (Osaka University)

We examined the contextual processing that leads to the production or comprehension of adjective expressions using eye-tracking experiments. It is known that adjectives depend largely on a speaker's interpretation of contexts; however, it is still unclear how speakers process environmental situations in order to output adjective sentences. Eye-tracking experiments with visual stimuli—adopting the visual world paradigm and setting up both areas of interest (AOIs) and times of interest (TOIs) for images—can elucidate each moment of the cognitive processes that contribute to a linguistic utterance due to its high time resolution. Our psycholinguistic experiments using this methodology revealed how speakers mentally handle several semantic/pragmatic components, which are offered in Sugaya (2020), involved in scalar adjectives in Japanese and Chinese, focusing on competitors (items compared with a target), the standard (a qualitative criterion leading to an absolute judgment), and the judge (the person evaluating a target).

Kennedy, Cristopher. 1999. *Projecting the Adjective: The Syntax and Semantics of Gradability and Comparison*. New York, London: Routledge.

Sugaya, Yusuke. 2020. *Constructing Evaluations: The Meaning-Making Process of Adjectives*. Ph.D. thesis, Kyoto University.

3-⑤13:40~14:15

The speech act of comforting during COVID-19: A case study of Spanish, English and Japanese speakers

CLOS, Ruben (University of the Ryukyus)

The beginning of the 2020s has been notably marked by the global pandemic caused by COVID-19. Although much is still to be known about the virus and its social repercussions at the time of this study, the focus is placed over the speech act of comforting by Spanish, English and Japanese speakers across different scenarios related to the pandemic. A discourse completion task (DCT) was conducted among speakers of these languages focusing on semantic formulae. The scenarios portrayed vary in nature and degree of severity, ranging from general anxiety about the possibility of contagion, to unemployment and death. Results for each language are discussed.

References: (1) Blum-Kulka, S., House, J. and Kasper, G. 1989. *Cross-cultural pragmatics: requests and apologies*. Norwood, NJ: Ablex.

(2) Elwood, K. 2004. "I am sorry": A cross cultural analysis of the expression of condolence." *Bunka ronshū*, 24.

3-⑥⑦司会：大久保朝憲（関西大学）

3-⑥14:20~14:55

従属節発話における文脈と慣習性 —「単純な」／「慣習化された」主節省略の分析から—

平尾恵美（舞鶴工業高等専門学校）

街で偶然 Mary に出会って言う“Well, if it isn’t Mary!”（「おや、Mary じゃないか！」と話し手の驚きを表出する）は、従属節が単独で現れて主節的に機能しており、insubordination の一例と考えられる。こうした insubordination の成立には「慣習性」が関わることを示されてきた（Evans (2007), Evans and Watanabe (2016)）。しかしながら、慣習性とは何か、何が insubordination を決定するのか、という本質的な問いに対しては、十分な結論に至っていない。本発表の主眼は、語用論的な観点から非 insubordination と insubordination との違いを明らかにし、「単純な」主節省略（従属節発話が従属節として機能する場合）と「慣習化された」主節省略（従属節発話が主節的に機能する場合）とを分けるものを明らかにすることを試みるところにある。具体的には、次の2点に着目して分析する：①先行発話と従属節発話との関係、②従属節発話の語用論的機能と文脈との関係。

参考文献：(1) Evans, N. 2007. "Insubordination and Its Uses." In I. Nikolaeva (ed.) *Finiteness: Theoretical and Empirical Foundations*, 366-431. Oxford: Oxford University Press. (2) Sansiñena, M. S., H. De Smet, and B. Cornillie. 2015. "Between Subordinate and Insubordinate. Paths Toward Complementizer-Initial Main Clauses." *Journal of Pragmatics* 77, 3-19.

3-⑦15:00~15:35

LINEに見られる「笑」の語用論的機能

高村 遼（立正大学）

日本人大学生が LINE（メッセージングアプリ）で使う「笑」の語用論的機能について発表する。LINE で用いられることばは、話しことばに近いものの書きことばである。したがって、「相互作用のある書きことばのイントネーションや周辺言語的な合図の欠落を補うため」（Werry 1996: 57 筆者訳）に笑（あるいは、ほかのバリエーション）を使い、書き手の主観性や間主観性を示している。本発表では、具体的に3つの機能について考察する。

- 1、書き手が笑を使い面白いと思っていることを示す例
- 2、書き手が笑を使い命題にユーモアを与え、読み手の笑いを誘う例
- 3、書き手が笑を使い面子威嚇行為を緩和する例

機能1は、書き手の主観性を示し、機能2と3は、書き手が読み手に対する配慮、いわゆる間主観性を示している。さらに、機能2は、積極的ポライトネス、機能3は、消極的ポライトネスに貢献している（Brown and Levinson 1987）。

実際に発表者が採取したデータを提示し、笑の実態を探りたい。

参考文献：(1) Bennett, G. A. 2012. "Say what? (xiao): the representation of laughter as a contextualization cue in online Japanese discourse." *Linguistica* 52(1), 187-199. (2) Brown, P. and Levinson, S. C. 1987. *Politeness: Some Universals in Language Usage*. Cambridge: Cambridge University Press.

特別講演 Plenary Lecture (15:40~16:40)

会場：メインルーム

「推意・意味・意図：グライス哲学における推意」

三木那由他先生（大阪大学）

【講師要旨】

会話的推意の理論はもともとポール・グライスが 1961 年の論文「知覚の因果説」(“The Causal Theory of Perception”)において、日常言語学派的な発想に基づくセンス・データ説への批判に反論するために考案したものだ。こうした背景からも明らかなように、グライスにとって推意の理論は会話分析のためのツールであったという以上に、ある種の哲学的議論に反駁するための武器であった。それゆえグライスはこの理論を単に有益なものとして提案するのみでなく、自身の哲学体系のなかに位置づけ、関連する概念に確固とした哲学的基礎を与えることを望んだ。その際に重要な役割を果たすのが、1957 年の論文「意味」(“Meaning”)に始まる話し手の意味の分析というプロジェクトであった。本講演では、推意の理論がグライスの哲学にどのように位置づけられるのか、推意の理論の基礎をなす話し手の意味の分析にいかなる問題があったのか、その問題を乗り越えるためにどのような発想が必要なのかということを論じる。

【講師略歴】

三木那由他（みき・なゆた）

2013 年 3 月京都大学大学院文学研究科博士課程認定退学。2015 年 9 月文学博士（京都大学）取得。2018 年 4 月大阪大学大学院文学研究科助教、2020 年 10 月 同研究科講師（現職）。専門は、現代分析哲学、言語哲学、特に P. グライスやその影響下にある意図基盤意味論の論者たちによる話し手の意味の分析（researchmap より）。著書に『話し手の意味の心理性と公共性：コミュニケーションの哲学へ』（2019 年）など。『群像』誌上で「言葉の展望台」を連載中。

（リサーチマップ <https://researchmap.jp/nayutamiki>）

懇親会 Reception<第 1 部> (17:00~18:20) 会場：Zoom メインルーム

懇親会 Reception<第 2 部> (18:30~20:00) 会場：Wonder.me

（いずれも、オンライン懇親会）大会参加登録者の懇親会参加は無料です。

今回は、ご講演者・シンポジウムご登壇者によるお話、また、書店さんによる新刊紹介などを織り混ぜた第 1 部と、参加者同士でより深く語り合う第 2 部を設け、懇親会が持つ「全体でお話を共有する場面」と、「ゆったり議論する場面」とを併せ持つ構成となっております。

第 1 部では、多くの方が集まって話を聞き、それをふまえた交流を後押しするオンライン会議ツール『Zoom』を、第 2 部では、それぞれの方が自由に移動して、旧交を温めたり新たな出会いを求めたりする雰囲気をご提供できるオンライン会議ツール『Wonder.me』を使用し、ビデオ・オーディオ・チャットによるコミュニケーションを通して、楽しく有意義な交流と議論の場にしたいと考えております。お一人でもご遠慮なくお越しください。皆様のご参加をお待ちいたしております。（懇親会用の『Zoom』ならびに『Wonder.me』のサイト情報は、ご参加の皆様に別途お知らせいたします。）

12月19日(日曜日)

□頭発表(10:00~11:55)

会場: Room 1

1-⑧~⑩司会: ツオイ・エカテリーナ(一橋大学)

1-⑧10:00~10:35

補足の接続詞における配慮の考察—「ただ」を中心に—

中後幸恵(創価大学大学院)

接続詞「ただ」には、川越(2006)が述べるように「わざと補足情報であるとする示すことで、押しつけがましさを減らす効果をねらうもの」(156)などのコミュニケーションに特化した用法があると考えられる。さらに、「ただ」は山岡他(2018)における「配慮して用いられることが、一定程度以上に慣習化された言語表現」(159)である「配慮表現」としての特徴も有していると考えられる。このように、補足の接続詞は、「補足」という機能を利用し、それぞれ独自の対人的な機能を有している可能性がある。本研究では、補足の接続詞それぞれのコミュニケーション上の機能・用法を語用論的観点から考察し、まとめることを目標とする。具体的には、補足の接続詞として、「ただ」を中心に「ただし」「もっとも」「ちなみに」「なお」を含めた5語について、自然会話コーパス調査やアンケート調査を通し、それぞれのコミュニケーション上の使用実態や各語彙の機能の異なりについて考察する。

参考文献: (1) 川越菜穂子.2006.「補足の接続詞とコミュニケーション上のストラテジー—ただ、ただし、もっとも、ちなみに—」益岡隆志・野田尚史・森山卓郎編『日本語文法の新地平 3—複文・談話編—』東京:くろしお出版. (2) 山岡政紀・牧原功・小野正樹.2018.『日本語語用論入門—コミュニケーション理論から見た日本語—』東京:明治書院.

1-⑨10:40~11:15

「マウンティング」をイン/ポライトネスから考える:「自分ほめ/自慢 (self-praise, bragging)」との比較を通して

大塚生子(大阪工業大学)

本研究では、「自慢(自分ほめ)」との比較を通して相互行為における「マウンティング」の特徴を同定し、マウンティングに対する評価をイン/ポライトネスの観点から考察する。マウンティングは、感情と品行、自他フェイスの不/均衡、利害とモラルオーダーなど、discursive turn以降新たに問われてきたイン/ポライトネス研究の様々な重要テーマに関連する言語的实践であるといえるだろう。

自分への肯定的評価を含む会話及びLINEでのやりとり6例(参与者統制なし)のうち2例が、発表者および日本語母語話者2名によってマウンティングと評価されたが、それらは1. 相手との相対的な位置関係、2. 否定的な自己評価、3. フロアとの関連の3点の組み合わせによって特徴づけられると推察される。また、特に上記2を含むと、話し手がFTを認識しつつその責任を回避するために偽ポライトネスを用いていると見なされ、狡猾なインポライトネスだと評価されると思われる。

1-⑩11:20~11:55

打ち言葉の感情表現: Twitter上の「怒り」表現に着目して

西村綾夏(フリー)

本研究では、打ち言葉における怒り感情についてTwitterの投稿を対象に分析した。具体的には、笑い表現を分析した西村・黒田(2018)の妥当性を量/質の双方から検証した。

本研究の前半ではTwitter APIを用いて怒り表現を採集した。その結果、怒りに対人配慮の笑いが伴う用法はリプライ(会話文脈)に多いこと、伴わない用法は政治・時事ニュースなどに多いことが明らかになった。後半では各用例の分析を通し、怒り表現に用いられる方略を記述した。その結果、Twitterにおける怒りでは対人配慮として、ハッシュタグや括弧を用い、メタ的なメッセージを付与する例、絵文字を複数個連続させることでコミカルな雰囲気を出す例、ツイートの後半部を方言で表現する例などが見られた。

以上からは、打ち言葉上の感情表出は受け手の存在が認知できるか否かで様態が変わること、表

出には一定の慣習が形成されつつあることが明らかになった。

主要参考文献: (1)西村綾夏・黒田一平. 2018. 「書き言葉の感情表現—インターネットスラングに見られる『笑い』—」、『日本語用論学会第20回大会発表論文週』、323-326. (2) 早川治子. 2000. 「相互行為としての『笑い』：自・他の領域に着目して」、『文学部紀要』14(1)、23-43. 文教大学.

□頭発表（10:00～11:55）

会場：Room2

2－⑧～⑩司会：中村香苗（淡江大学）

2－⑧10:00～10:35

縦断的データにみる中級日本語学習者の語用論的理解能力 —習得過程と言語環境の変化との関連性をめぐって—

堀田智子（東北大学）

第二言語学習者の語用論的能力の習得は、対象となる言語現象によって異なり、学習環境や習熟度など、様々な要因が複雑に関わる (Taguchi & Roever 2017)。

本研究では、国内在住の中級日本語学習者 20 名を対象に縦断的調査を行い、間接不同意行為に対する理解能力の習得過程を検討するとともに、当該能力の習得と言語環境の変化との関連性を探った。

聴解テストの結果、特に調査開始時に得点の低い学習者は、正確かつ迅速な判断が次第にできるようになること、また、正確さの向上と語用論的处理速度の短縮には強い関連性があることが分かった。自己報告調査の結果からは、習得には社会的接触の密度 (intensity of interaction) が作用する可能性が示された。

これらは、語用論的理解能力の習得と言語の社会化 (Schieffelin & Ochs, 1986) との関わりを示唆するものである。

参考文献: (1) Schieffelin, B. B., & Ochs, E. 1986. Language socialization. *Annual Review of Anthropology* 15. 163-191. (2) Taguchi, N., & Roever, C. 2017. *Second language pragmatics*. Oxford/New York: Oxford University Press.

2－⑨10:40～11:15

DLA（対話型アセスメント）における質問応答連鎖の会話分析—第三の位置での指導者の反応に注目して—

嶋原耕一（東京外国語大学）

本発表では、外国人児童の日本語力測定のため開発された DLA（対話型アセスメント）における、指導者と児童の相互行為を会話分析の手法で分析した結果を報告する。DLA は一対一での対話を通した評価活動であり、児童に対する日本語の指導方針を立てるために実施される。注目したのは、指導者の質問に対する児童の応答に続く、指導者の反応である。この位置の反応については、例えば Mehan (1979) が教室場面において日常会話と異なる特徴が見られること (IRE 連鎖) を明らかにしている。今回分析したデータでは、日常会話とも IRE 連鎖とも異なる指導者の反応を、繰り返し観察することができた。その一つが、「児童の応答の繰り返し+そうですか」という発話である。身体の振る舞いもあわせ分析した結果、そのような発話によって、指導者がその位置で客観的な記録者であることと、児童の対話者であることを達成していると考えられた。

参考文献: (1) Mehan, H. 1979. “What time is it, Denise?” Asking known information questions in classroom discourse.” *Theory into Practice*, 18(4), 285-294.

2－⑩11:20～11:55

中国語の例示を表す形式の意味拡張：母語話者の会話データに基づいて

黄 琬婷（上智大学）

中国語の例示を表す形式の“什麼的 (shenmede)”は、その前接する要素以外に、他の類似要素が存在していることを表す表現である。一方、他の類似要素の存在が連想しにくい場面にも用いられるという指摘があり (董曉敏 1998 など)、元の意味に変化が起きていることが示唆されている。本研究は、中国語母語話者による二者間の自然会話データを用いて分析した結果、類似要素の存在が暗示されない場合、“什麼的”の付加によって、前接の要素を焦点として取り立てるという新しい用法が観察された。この用法は本来の例示用法から意味の変化を経て拡張されたものであると考える。

参考文献：(1)董曉敏.1998.「説“X 什麼的”」.《漢語學習》.第 3 期.13-15.(2)沼田善子.2009.『現代日本語とりたて詞の研究』.ひつじ書房.(3)松本曜編.2003.『シリーズ認知言語学入門第 3 巻 認知意味論』.大修館書店.

□頭発表（10:00～11:55）

会場：Room3

3－⑧～⑩司会：遠藤智子（東京大学）

3－⑧10:00～10:35

「ほめに対する応答」に影響する要因の分析 ―ほめられる側の立場から―

昂燕妮（名古屋大学大学院）

従来の研究では、「ほめに対する応答」を肯定・否定・回避に分け、どのカテゴリーが選ばれやすいかは、言語文化・ほめの対象・人間関係などの、社会言語学的な要因の影響を受けるという。具体的な発話場面において、ほめられる側はどのような判断や解釈を経て応答をとっているのかという、ほめられる側の立場に立った分析は行われていない。

本研究は会話とフォローアップインタビューに基づいて、ほめられる側の立場から「ほめに対する応答」の選択に影響を与える要因を分析した結果、「与えられたほめ行動への認識」「ほめられる側の自己評価」「人間関係の営み」の三つの要因を明確にした。ほめられる側はほめをそのまま受けとるのではなく、与えられたほめを自ら解釈し、付加された価値と自分の自己評価に照り合わせ、友好的な対人コミュニケーションを図りながら、複数の要因を総合的に考慮したうえで応答をとっているのである。

3－⑨10:40～11:15

日本語の慰め行動における性差―同性友人間の比較から―

張楽（金沢大学大学院）

本発表の目的は、日本語における同性友人間の慰め行動を相互行為という観点から分析し、男性と女性それぞれの典型的な慰め行動のフローを抽出することにある。これまで、慰め行動を複数の発話行為からなる相互行為という観点から段階分けし、各段階に現れる発話を分析することにより慰め行動の全体像を明らかにしようと試みた研究は見られない。そこで、本発表では、慰め行動を「前慰め段階」・「慰め段階」・「後慰め段階」の 3 段階に分け、張(2020)で提出されたアニメの慰め行動における性差の検証を試みた。その結果、張(2020)のアニメ分析の結果とは異なるが、慰め行動のフローに性差が確認できた。男性の慰め行動では相手の現状を速やかに把握し、問題解決のためにアドバイスするという問題解決型のフローが見られた。他方、女性の慰め行動では感情を中心に相手を安心させ、自信を持たせるという感情重視型のフローが観察された。

参考文献：張楽. 2020. 「慰め行動における性差―青春もののアニメの分析―」、『日本語用論学会第 23 回大会発表論文集』第 16 号、33-40.

3－⑩11:20～11:55

会話文での AND X 形式の表現と話し手

野島啓一（北九州市立大学（非常勤））

本発表では、会話で冒頭が接続詞 and から始まる表現形式を考察の対象にする。例えば、AND + 名詞? の形式の表現を取り上げ、その表現が使用される文脈で、単に YES か NO かの答えを期待する以上の情報が伝えられている用例を検討する。この表現形式で、名詞の部分が抜けた And? の表現が質問の催促を促す意味を派生させることを示し、この派生された意味は、語彙的意味ではなく、寧ろ、話し手は、語の使用に関する機能として捉えているとする考え方を例証する。また、No 'and' の表現形式は、メタ的意味の解釈が可能で、その解釈は話し手の語の使い方を示した機能的観点から捉えられることを示す。AND X 形式の表現は、話し手が発話をする現時点との縛りを基準にした捉え方からその意味が解釈できる可能性について、そのプロセスを明らかにする。

参考文献：(1) 早瀬尚子 [編]. 2018. 【言語とコミュニケーション】. 東京. (2) 池上嘉彦. 山梨正明 [編]. 2020. 【認知言語学 II】. 東京

ポスター発表（12:00～13:00）

会場：Room1・2・3

会場係：井出里咲子（筑波大学）

Room1

知人関係における日本語版交感現代日本語の交感発話の特徴—会話の開始部を中心に—

肖 潔（北海道大学大学院）

本発表の主眼は、人間の感情的交流（距離の近接化、会話場面の雰囲気調整など）において役割を果たした交感発話が知人関係の会話開始部では、どのように働いているのかを考察するところにある。具体的には、言葉のメタレベル、「前景と背景」（ジョナサン・カルペーパー/マイケル・ホー, 2020:57-101）という概念から交感発話の特徴をとらえたうえで、知人関係にあるサービス場面関係、仕事関係、家族関係、友人関係、恋人関係の種々の場面の会話例を収集し、社会語用論の観点から考察する。会話開始部の交感発話は、どのような形式（もしくは、発話内容）で行われ、そして、それぞれどのような位相・動機づけをもって、人間同士の距離調整において働いているのかを語用論のプロセスの解釈によって明らかにする。また、話者性別、年齢身分差、タ形と非タ形の使用有無などの要素を考慮しながら分析を行う。

参考文献：ジョナサン・カルペーパー/マイケル・ホー. 2020. 「第3章 情報語用論」. 『新しい語用論の世界—英語からのアプローチ』. 57-101. 椎名美智監訳. 加藤重広訳. 研究社.

Room2

金沢市の商業地に見られる禁止表現—ターゲットによる違いの分析—

賈羽飛（金沢大学大学院）

金（2011）は、看板における禁止表現が設置場所により違いがあり、商業地では特に待遇度の高い表現が使用されると指摘している。しかし、商業施設には、顧客向けの看板だけでなく、従業員向けの看板も存在する。本研究では、商業施設に見られる看板の禁止表現をターゲット層の違いという観点から分析し、言語表現の待遇度の違いを明らかにする。また、禁止表現の認定については、従来の否定形式を伴う表現という観点と異なり、たとえば「ご家庭にて処分をお願いします」といった肯定形式による「非明示的禁止表現」をも禁止表現の一種とみなして分析する。このように多面的に禁止表現を捉える枠組みで分析した結果、従業員向けの看板では待遇度の低い禁止表現を使用し、情報伝達の効率を重視するのに対して、顧客向けの看板では待遇度の高い禁止表現が使用されるだけでなく、現場の状況に関する情報も同時に提示することで対人配慮を行うことが分かった。参照文献：金順任. 2011. 「日本語と韓国語の言語景観における禁止表現—場所による違いを中心に」、『明海日本語』16、53-62.

Room3

The Sequential Environments of the Appendor Question

Sally Jones (Nagoya University)

This paper will take a conversation analytic approach to examining the appendor question in different sequential environments, with the appendor question being a semantic and syntactic extension of a prior, possibly complete turn. Analysing naturally-occurring conversations in English under the methodology of conversation analysis, the appendor question was found in the following sequential environments: informing sequences; after a topic initial turn; initiating repair; displaying disbelief; and being a harbinger for a disaffiliative action. Interestingly, these seem to somewhat align with those found for 'Proffering Insertable Elements' (Hayashi and Hayano, 2013), an equivalent Japanese phenomenon to the appendor question. In all, we can see how appendor questions have been designed and understood by the participants themselves, as well as the sequential environments in which they are used in English conversation.

Reference

Hayashi, M. and K. Hayano. 2013. "Proffering Insertable Elements: A Study of Other-Initiated Repair in Japanese." In G. Raymond, J. Sidnell & M. Hayashi (eds.) *Conversational Repair and Human Understanding* (pp. 293-321). Cambridge, United Kingdom: Cambridge University Press.

会員総会 General Meeting of Members (13:30~13:50)

会場：メインルーム

会員の方はご参加ください。

議題：本大会のテーマについて・大会発表賞の発表表彰・会長等役員の改選についてなど

シンポジウム Symposium (13:50~16:30)

会場：メインルーム

1. テーマ 語用論的方言学への招待

2. 趣旨

日本語は語用論的に見た場合、決して一枚岩ではなく、多様性に満ちている。そうした多様性のひとつが地理的変異である。近年、日本語方言は構造的な面だけでなく、その運用面においても地域差の存在が明らかにされつつある。語用論的な視点に立つとき、日本語にはどのような地域差が浮かび上がるのだろうか。ここではそうした興味に根差す研究を「語用論的方言学」と名付け、その世界を紹介していく。「方言学」と「語用論」とは、これまでかならずしも交流が活発でなかったが、このシンポジウムを機に、両者の交流から新たな研究が生み出されることを目指す。

3. 登壇者紹介

小林隆（東北大学）：方言の語用論的な地域差とその背後に潜む発想法の違いに興味がある。感動詞やオノマトペの役割にも語用論的な地域差があるのではないかと思い、いろいろ考えている。

中西太郎（跡見学園女子大学）：日本語あいさつ表現の研究を基盤に、あいさつの対照研究、言語行動の変異の研究、方言コーパスを用いたフィラーの研究、非母語話者へのコミュニケーションの研究を行っている。

津田智史（宮城教育大学）：日本語とくに方言のテンス・アスペクトについて研究をおこなっている。最近では、人が事態をどのように認識し、言語化しているか、またそこに地域差があるのかにも興味がある。

椎名渉子（名古屋市立大学）：日本語の言語行動の地域差解明において評価にかかわる言語行動を中心に、また、子守歌詞章を言語行動・談話の分析の観点から捉えることをめざしている。

滝浦真人（放送大学）：言語の対人的機能をめぐり、イン／ポライトネスのコミュニケーションを研究している。近年は特に、近現代日本語における敬意漸減を動因とする現象に注目している。

4. 発表内容（話題）

発表1 語用論的方言学の構想

小林隆（東北大学）

私の発表のねらいは、語用論の視野を方言にも広げるとたいへん興味深いことが見えてくる、と主張するところにある。「語用論的方言学」の構想について述べながら、その魅力をアピールしてみたい。まず、日本語には語用論的な地域差が存在することを指摘する。次いで、そうした地域差を扱う「語用論的方言学」を定義し、学問的な位置づけを行う。さらに、その研究対象とこれまでの成果を紹介し、独自の視点や研究の射程について論じていく。東日本大震災の被災地で、支援者が地元の人たちの話しぶりに抱いた違和感を糸口に、「語用論的方言学」の世界に案内していきたい。

発表2 言語行動の方言学

中西太郎（跡見学園女子大学）

言語行動の方言学的研究については、依頼、感謝などの典型的な言語行動の地域差の解明に始ま

り、近年になって、地域差の背景となる理論（「言語的発想法」など）をもとに、解明する言語行動の射程を広げる動きが起き、分析視点も精緻化しつつある。本発表では、筆者が共同研究者（東京女子大学：篠崎晃一氏）と行った全国規模のアンケート調査の結果をもとに、典型的な言語行動以外の場面における地域差の実態を紹介する。また、そのデータをもとに実証された、言語行動の変異解明に有効な地域差以外の分析視点（都市構造差）も取り上げる。そして、これらの成果が、語用論の研究視点に照らしてどのように捉えられるのか、その意味を検討したい。

発表3 ポライトネスの方言学

津田智史（宮城教育大学）

近年の研究成果により、運用される言語形式や表現の地域差だけでなく、それらを発話する前段階の言語態度（発話態度）にも地域差があることが明らかになりつつある。発表者も言語行動の分析から、東北には「相手に寄り添う」言語態度がみられることに言及してきた。本発表では、言語行動研究において対極的にとらえられる東北と近畿を取りあげ、先行研究のデータをもとに言語態度とポライトネスの関係について論じる。近畿のコミュニケーションや言語運用のあり方がポライトネスを強く反映するものなのに対し、東北ではその傾向が薄い。そこには、言語態度の違いがかわることを述べる。

発表4 語用論的方言学の資料

椎名渉子（名古屋市立大学）

方言学における言語行動の研究では会話（談話）資料を分析対象に地域差が解明されてきた。そのような分析視点を別の資料にも向け、多角的に日本語の言語行動の地域差・地域性を捉えることはできないか。そこで口承文芸としての子守歌詞章に注目し、歌のことばと日常のことばの地域差から、2つの素材に共通した特徴を見出す。具体的には、言語的発想法の観点から見いだされた言語行動のこれまでの地域的特徴と、子守歌資料から見いだされた地域的特徴の連続性を指摘する。それらを通して、子守歌資料のような直接的な談話資料・言語データではないものも、言語行動の地域差を補強し、地域性をかたちづくる根源の解明に迫れるという可能性を示したい。

コメント 一般語用論の視点から

滝浦真人（放送大学）

方言学の一環として行われてきた「言語行動」の研究に触れると、それらがいかに「語用論的」であるかに驚かされる。さらには、上書きされた「標準語」の下層で生きてきた諸方言を語用論的に見たとき、東アジアの近隣諸言語との類縁性にも気付かされる。そうした問題関心も持ちながら発表を聞いてディスカッションができれば幸いに思う。

閉会式 Closing Ceremony (16:30~16:40)

会場：メインルーム

★談話室★

(18日：10:00～15:35、19日：10:00～13:00)

会場：ROOM4

大会リアルタイム開催期間中(12月18・19日)、談話室を開設いたします。

こちらでは、オンライン会議ツール『Zoom』にて、語用論研究にまつわる話やよもやま話など、皆さんに自由にお話しただけの場をご提供いたします。談話の場、また、憩いの場としてどうぞご利用ください。(『Zoom』サイト情報は、ご参加の皆様へ別途お知らせいたします。)

★書籍展示★

言語学関連出版社の書籍展示を2通りの方法で行います。詳細は追ってお知らせしますので、日本語用論学会ホームページにてご確認ください。

- 1) 出展出版社の展示サイト入口(12月18～19日): 参加申込者に事前にお届けするお知らせの中に、各出版社のオンラインストア(各社特設サイト)へのリンクを列挙掲示します。併せて、以下、「★出展出版社★(五十音順)」に掲載のバナーをクリックしていただきますと、各社特設サイトに繋がります。
- 2) 「新刊紹介」(12月18日): 今大会では、懇親会(第一部)の会場において、くろしお出版さん、ひつじ書房さんが新刊をご紹介します。書籍が皆様の目の前にあるような臨場感をもった展示、どうぞ、この機会をお見逃しなくご参加ください。

★出展出版社★

(五十音順)



特別割引販売



実施中

くろしお出版



研究社
KENKYUSHA



大修館書店

おすすめの本

ひつじ書房

日本語用論学会
特別セール開催中



明治書院

[illegible]

大会実行委員会・委員長 (オンライン) 委員	八木橋宏勇(杏林大学) 尾谷 昌則(法政大学), 金丸 敏幸(京都大学), 木山 幸子(東北大学)
大会企画委員会・委員長 副委員長 委員	尾谷 昌則(法政大学) 井出 里咲子(筑波大学), 岡本 雅史(立命館大学) 有光 奈美(東洋大学), 小松原 哲太(神戸大学), 堀内ふみ野(大東文化大学)
大会発表委員会・委員長 副委員長 委員	金丸 敏幸(京都大学) 西田 光一(山口県立大学), 横森 大輔(京都大学), 小松原 哲太(神戸大学)
大会発表賞小委員会委員長 大会総務委員会・委員長 副委員長 委員	西田 光一(山口県立大学) 山岡 政紀(創価大学) 八木橋 宏勇(杏林大学), 竹田 らら(昭和女子大学), 甲田 直美(東北大学) 牧原 功(群馬大学), 太田有紀(東北大学), 加藤万紀子(東北大学)

日本語用論学会会長： 滝浦 真人（放送大学）
日本語用論学会事務局長： 北野 浩章（愛知教育大学）
日本語用論学会事務局： 〒448-8542 愛知県刈谷市井ヶ谷町広沢 1
愛知教育大学 人文社会科学系 日本語教育講座 北野浩章 研究室内
E-mail : secretary@pragmatics.gr.jp

[illegible]